



合気道が普及されてゆく過程においては、たくさんの人々の協力が必要である。数人の人がボソボソとつぶやくように囁きあっても、決して大きく広がってははいかない。

昔、合気道の源流は一般公開されず、「お止め技」として武田家だけに代々伝えられていたのだから、勿体無い話だと思う。

ところがこの極秘武道を今、私たちが体験できるのはやはり、武田惣角～植芝盛平～塩田剛三の突出した名人が、まるで以前からの相談でもしていたように、時代に重なり合って現れてくれたからである。

物事の伝承というのは、後継者がいなければ、いつかは滅びてしまう。

そう考えるとそれぞれの實力はともかく、今、合気道を学んでいる私たちは、遠い昔、新羅三郎義光の発案武道を型を変えながらも、ずっと守っている一員ということになる。これはエライことに参加している訳だ。

だってそうではないか。百年とか二百年とか前の江戸時代の伝統芸術を守っている人たちのことをスゴイと思っていたが、歴史の長さから言ったら合気道はその比ではない。

たまにはそういう観点から、合気道に接している自分を眺めるのも悪くない。

合気道が上達するためには、良き師につくことが勿論大切であるが、それよりも自分自身の「教わり方」が重要であると思う。

現在、指導者の立場で活躍されておられる先生方も、かつては「教わり上手」だったに違いない。教わり方の極意。それはひと言で言えば素直さであろう。

合気道に限らず、なんでもそうだ。先生の言われる事を純真な心で聞く。

この先生はなにを伝えようとしているのかを集中して聞く。そして自分で試してみる。勿論最初は上手くいかない。先生に指導を受ける。また試す。

頭の中ではわかっているのだが体が反応しない。自分の手足が他人のようだ。

そしてまた練習する。

この期間は自分自身まったくいやになってしまうのだが、実はこの「時間」をかける事が大切なのである。

慌てることはない。なにしろ我々は悠久の歴史の中にいるのだから...

上等なワインも長い間、寝かせてあったではないか...

これが修業というものだろう。

ところで私は、東京の両国にあるのB G両国合気道部で、千田師範（現、養神館本部道場長）について約25年間指導をいただいている。

三ヶ条の技を反復練習していた時に、ちょっとした事に気が付いた。

稽古仲間と試してみる。するとこれが上手くいくのだ。

重大発見した私は、これぞ技のひらめきなりと有頂天になり師範に報告した。

「先生！ こういうことに気が付いたのですが...」私の鼻息は荒い。

師範はにこりとして「そうですか、それはよかったですね。でもそれ10年前から言ってるのですが...」「.....」こんなものである。